古英語複合語の第二要素の強勢

藤　原　保　明

まえがき

古英語の複合語は、共時的観点からだけでも、第二要素の強勢の程度、句との区別、構成素の意味的関係など、未解決の課題に満ちている。本稿では、これらの問題点のうち、第二要素の強勢の程度に関わる新たな言語事実に基づいて分析と考察を試み、古英語複合語の言語特性の一端を解明したい。

1.　古英語複合語の定義

本稿で分析対象としている古英語の複合語（compound words）とは、複数の独立語から成り、強弱の強勢型を示す語のことであり、いずれかの構成素が非独立の拘束形式（bound forms）のみから成る合成語（complex words）は含まれない。したがって、ín-wit-ðànc 'evil thought', ā̀n-for-lǽtan 'forsake', hónd-ge-wìnn 'combat' の場合、一方の構成素には拘束形式が含まれているが、構成素そのもの、すなわち、ín-wìt, for-lǽtan, ge-wínn は独立語であることから、語全体は複合語とみなされる。一方、ún-rì̀m 'countless number', mís-ge-hỳgd 'evil thought', fēond-scìpe 'enmity', clǽn-nès 'purity' の場合、強勢型は条件を満たしているものの、拘束形式だけの構成素が含まれていることから、複合語とはみなされない。さらに、ofer-wádan 'wade across', under-gā́n 'undergo', ymb-hríngan 'surround' などの語のように、独立形式の結合であっても複合語とみなされないのは、強勢上の条件を満たしていないからである。なお、本稿では語構造を明確にするために接尾辞以外の境界はすべてハイフンで記すことにする。ちなみに、現代英語の場合、たいていの複合語は上記の基準を満たすが、fàr-awáy, fàst-móving, fìrst-hánd, hèad-místress, rìght-hánded, sùper-húman, wòrld-wíde のように、独立語の複合ではあっても弱強の強勢型を示す語が少なくないことから、複合語の定義は古英語の場合とパラレルではなさそうである。

古英語の複合語には強弱という強勢型以外はありえないとする根拠は、単一語の頭韻は常に最大強勢を担う音節の初頭子音に実現するが、複合語の頭韻は

第一要素にのみ現れ、第二要素には生じないことから、第二要素には強勢従属が起こって第一要素の強勢より弱くなると考えられるからである（藤原 1990:11-60）。なお、古英語の複合語のうち、第二要素が頭韻に関与し、第一要素が関与しない例として、hund を第一要素とする数詞があげられる。しかし、この用法の hund は頭韻上も意味上も必要不可欠なものとはみなされていないことから、無強勢の接頭辞と同等の資格を持つに至っていて、語全体は合成語とみなした方がよいこと（藤原 1991:29-39）、古英語には弱強の強勢型を示す hund と類似の複合語の例が他に全く存在しないことから、上記の古英語複合語の定義には例外はないと考えてよい。

2. 古英語複合語の第二要素とその強勢の程度

問題となるのは、古英語複合語の第二要素の強勢が強勢従属の結果、どの程度まで弱化しているかということである。この課題に取り組む前に、古英語の形容詞＋名詞という句を取りあげ、強勢従属の問題を考えてみたい。なぜなら、現代英語では、形容詞＋名詞という結合には、a bláck-bìrd, a bláck-bòard, a dáncing-gìrl という複合語と、a blàck bírd, a blàck bóard, a dàncing gírl という句があり、両者の間には強勢型と意味に大きな違いが認められることから、古英語にもこの種の現象が存在するかどうかを明確にする必要があるからである。そこで、最初に、(1) にあげた *Beowulf* の例について考察してみたい。なお、本稿では頭韻に関与する子音は斜字体で示し、a は第一半行、b は第二半行を表すこととする。

(1) (a) *s*nótere céorlas 'wise men' (416b), *d*ēoran swéord 'with bold sword' (561a), *w*únden góld 'twisted gold' (1193b)

(b) *d*úguð ún-lȳtel 'no little tried warriors' (498a), *l*ēoht ún-fæger 'terrible light' (727b), býrnan sīde 'broad corselet' (1291a)

(c) þes *h*éarda *h*ēap 'this strong band' (432a), *b*ēah-sele *b*éorhta 'the bright ring-hall' (1177a), *g*ēo-sceaft *g*rímme 'grim fate' (1234a)

(1a) の名詞句は、形容詞＋名詞から成るが、頭韻しているのは形容詞である。これに対して、逆の語順で構成されている (1b) の名詞句では名詞の方が頭韻に加わっている。さらに、(1c) では、形容詞と名詞の語順にかかわらず、句を構成する 2 語はいずれも頭韻に関与している。これらの例から導き出せるのは、古英語の場合、i) 句の構成素である形容詞と名詞の間には現代英語のような強勢従属は存在しない、または、ii) たとえ強勢従属が生じていたとし

ても、頭韻に関与しえないほど強勢は弱化していない、のいずれかである。しかし、このいずれが事実であるかについては決め手に欠くため、ここでは結論は出せない。

それでは、複合語の構成素間での強勢の弱化はどうであろうか。最初に、*Andreas* から採った（2）の例について検討してみたい。

（2）（a）*b*régo-stȍl ‘princely stool’（209a）, *h*éofon-càndel ‘lamp of the sky, i.e. the sun’（243b）, *h*ólm-wèarde ‘ocean guardian’（359b）

（b）*f*ā́mig-hèals ‘with foaming prow’（497a）, *h*ḗah-fædera ‘patriarch’（791a）, *f*ḗor-wègas ‘remote journey’（928a）

（c）*n*éaro-*n*ȅdum ‘cruel bond’（102a）, *h*éofon-*h*ȁlig ‘of heavenly holiness’（728a）, *w*él-*w*ànge ‘field of slaughter’（1226a）

まず、（2a）は名詞＋名詞、（2b）は形容詞＋名詞という形式の複合語であるが、いずれも第一要素のみが頭韻に加わり、第二要素は加わっていないことから、構成素の語彙範疇の如何にかかわらず、第一要素の強勢は第二要素の強勢より強く、それゆえ、語の最大強勢を担っている第一要素だけが頭韻に関与するという一般化ができそうである。しかし、（2c）は二つの構成素の強勢音節の初頭位置にある子音はいずれも同一音となっていることから、（2c）のような場合の二重頭韻が偶然の一致に基づくものであることが立証されない限り、この一般化は効力を持たない。

3. 複合語の構成素間での二重頭韻の解釈（1）

そこで、（2c）のような複合語の強勢と頭韻の関係を考察した先行研究の例として、藤原（1990：183-192）を取り上げて検討したい。この研究は、*Beowulf* から語レベルの主強勢が 2 ～ 4 つ含まれる長行をすべて抽出し、副強勢の数と分布を考慮して A 類（ ´ ´ ‖ ´ ´ ）、B 類（´ ´ ‖ ´ `）、C 類（´ `‖ ´ ´ ）、D 類（ ´ `‖ ´ `） に分け、それぞれの類について、二重頭韻、単一頭韻、余剰頭韻という 3 種類の頭韻形式の生起頻度を調査し、分析と考察を行ったものである。なお、各類の ‖ は半行間の境界を表す。まず最初に、A 類（合計 1,170 行）の場合、（3a）のような二重頭韻は過半数を超える 617 行（55.74 %）に生じるのに対して、（3b）のような単一頭韻は半数以下の 490 行（44.26 %）にとどまる。さらに、（3c）のような余剰頭韻はわずか 29 行（5.92 %）と少ない。

（3）（a）*f*ȳ́r ond *f*ǽstor　　sē þǣm *f*ḗonde æt-wánd（143）‘he who escaped the

fiend (kept himself) farther off and more secure'

(b) *B*ēowulf máþelode, *b*éarn Écgþēowes (529) 'Beowulf, son of Ecgtheow, spoke'

(c) *s*ígora Wáldend, þæt hē hyne *s*ýlfne gewræc (2875) 'wielder of victories, (granted him) that he might avenge himself'

これに対して、B 類と C 類のように副強勢が一つ含まれる場合、副強勢と頭韻の関係はきわめて明瞭なものとなってくる。まず、B 類（合計 125 行）の場合、(4a,b) に示したように、二重頭韻と単一頭韻の生起頻度は A 類の場合と大差ないが、これは第一半行が副強勢を含まないことが深く関わっているようである。事実、(4c) のように副強勢音節が頭韻に関与していると思われる例は全体のわずか 1 例にとどまっていることから、偶然の一致の可能性が強い。

(4) (a) 二重頭韻がみられる例（合計 77 行、61.6%）

Þā wæs *é*ft swā *æ*r *é*llen-rōfum (1787) 'Then again, as before, (a feast) was (prepared) for the courageous warriors'

(b) 単一頭韻がみられる例（合計 48 行、38.4%）

æt *n*īða ge-hwām *n*ȳd-ge-stèallan (882) 'in any struggle comrades in need'

(c) 余剰頭韻がみられる例（合計 1 行、1/48=2.08%）

Þǣr æt *h*ȳðe *st*ōd *h*ríng*ed*-*st*èfna (32) 'There, at the harbor, the ship with a ringed stem stood'

それでは、第一半行に副強勢が含まれる C 類の場合はどうであろうか。この類に該当する 452 例のうち、二重頭韻がみられる (5a) のような例はわずか 21（4.65 %）にすぎない。一方、単一頭韻が実現する（5b）のような半行は、これに反比例して 431 例（95.35 %）と激増する。(5c) のような余剰頭韻は 35 例（35/452=8.1 %）と決して多くはない。したがって、C 類の場合、強勢と頭韻に関して言えることは、B 類の場合と同様、主強勢の代わりの副強勢は頭韻の実現を阻んでいるということである。

(5) (a) geond *w*īd-*w*ègas *w*úldor scēawian (840) 'throughout the wide ways to see the wonder'

(b) of *f*ēor-wègum *f*rætwa ge-lǣded (37) 'from distant lands jewels (were) brought'

(c) æfter *c*éar-*w*èlmum *c*ōlran *w*éorðað (2066) 'on account of welling sorrow becomes cooler'

最後に、2つの主強勢の代わりに副強勢2つを含むD類の場合について検討してみる。この類に該当するのは全体で 27 例と少ないが、特徴は明瞭に現れている。すなわち、(6a) のような二重頭韻は3例 (11.11 %) にとどまるのに対して、(6b) のような単一頭韻は24例 (88.89 %) と激増する。一方、(6c) のような余剰頭韻は、予想どおり少なく、3 例 (3/24=12.5 %) にとどまる。

(6) (a) *h*éard-*h*ìcgende　　*h*ílde-mècgas (799) 'the brave-minded warriors'

(b) *H*éaðo-Scìlfingas　　*h*éals-ge-bèdda (63) 'the dear consort of the warlike Scylfing'

(c) Hwæt, wē *G*ā́r-*D*ène　　in *g*ḗar-*d*àgum (1) 'Lo! We (have heard) of the Spear-Danes in days of yore'

以上の分析結果を総合すると、二重頭韻と余剰頭韻の生起頻度は強勢の程度に大きく左右され、副強勢が関与するこれら二種類の頭韻の出現率は激減するといえる。問題となるのは、わずかではあるが生じている副強勢音節が関与する頭韻例の扱い方である。すなわち、たとえ少数であれ、例外とみなすためには明確な論拠が必要となる。以下は藤原 (1990 : 190-191) で提示されている根拠である。

古英語の子音組織は /p b t d k g tʃ dʒ m n r l f θ s ʃ h w j/ の 19 の子音音素から成る。一般に母音の頭韻例とみなされているものは、実際には声門閉鎖音 [ʔ] が実現していると考えるのが妥当であることから (藤原 1990 : 64)、この子音も加えると、古英語の頭韻には 20 の子音が関与していることになる。(ちなみに、声門閉鎖音には対応する文字がないことから、本稿では便宜的にこの子音の直後の強勢母音を斜字体で記すことにする。) したがって、古英語の場合、与えられた2つの語は、韻文であれ散文であれ、その2つの主強勢音節の初頭位置に生じる子音は 20 例につき1例の割合 (すなわち、5 %の頻度) で同一となるはずである。古英詩における頭韻は、同じ行の中で同じ子音が繰り返し生じるように詩人が工夫した結果であるため、5 %以下の頻度で生じる同一音は、古英詩人の技巧の産物ではなく、散文でも生じうる単なる偶然の一致であって、頭韻とは呼べない。(4) ～ (6) の例にみられる副強勢を含む語の二重頭韻と余剰頭韻の頻度はいずれも偶然の域を出ていない。これによって、副強勢音節は頭韻に関与していないという結論が導き出されることになる。

4. 複合語の構成素間での二重頭韻の解釈 (2)

前節で得られた結論はデータの裏づけのある説得力に富むものである。しか

し、藤原（1990）の分析には問題点がないわけではない。すなわち、二重頭韻は第一半行に限られていること、一方、単一頭韻は第一半行と第二半行双方に実現すること、二重頭韻は単一頭韻より頻度が高いこと、さらに、余剰頭韻は単一頭韻が前提となっていること、などの半行の特殊性や頭韻型の違いが考慮に入れられていないという欠陥がある。そこで、本稿では第一半行と第二半行における複合語の生起頻度の違いなどを綿密に調査することにした。

最初に、古英詩からすべての複合語を抽出するという作業から始めねばならないが、すべての古英詩を対象とするのは時間の制約上無理があるので、今回は（7）にあげた 12 編の古英詩に限定することにした。これらの詩は得られるデータに偏りが出ないように規模やテーマとは関係なく無作為に選んだものである。複合語と句の境界は必ずしも明確ではないため、この判断は各作品の校訂者に委ねることにした。固有名詞の中には普通名詞や形容詞と同一語形の構成素から成ると思われる例は少なくないが、片方の構成素がどのような独立語に対応するかが不明なことも多く、第 1 節の複合語の条件を満たすかどうかはっきりしないことから、今回の分析対象からは除外した。なお、以下、各作品に記した複合語の数はすべて延べ数となっている。

（7）*Andreas*（全 1722 行、771 例（a=499 例, b=272 例））
Beowulf（全 3182 行、1471 例（a=1028 例, b=443 例））
Cædmon's Hymn（全 9 行、6 例（a=2 例, b=4 例））
Deor（全 42 行、8 例（a=7 例, b=1 例））
The Dream of the Rood（全 156 行、43 例（a=27 例, b=16 例））
Elene（全 1321 行、475 例（a=325 行, b=150 行））
The Fight at Finnsburg（全 48 行、16 例（a=8 例, b=8 例））
Juliana（全 731 行、241 例（a=167 行, b=74 行））
The Phoenix（全 677 行、204 例（a=133 例, b=71 例））
The Riming Poem（全 87 行、36 例（a=22 例, b=14 例））
Waldere（全 63 行、15 例（a=11 例, b=4 例））
Widsið（全 143 行、23 例（a=15 例, b=8 例））

（7）の数値から明らかとなることは、複合語は平均すると 3 行につき 1 例の割合で用いられていて、第一半行では第二半行のほぼ 2 倍の頻度で生じているということである。第一半行に複合語が多用されているという事実は、頭韻、とりわけ第一半行にのみ生じる二重頭韻との関わりを探る上できわめて重要である。そこで、まず最初に、*Andreas* で用いられているすべての複合語の中か

ら第一要素と第二要素の強勢音節の初頭位置に来る子音が同一となる複合語をすべて抽出してみた。(8) はその結果である。なお、この一覧表では、屈折語尾や若干の語形の違いは無視して同一項目に入れてある。きわめて興味深いことに、該当する 23 例はすべて第一半行に生じていて、第二半行には全く生じていない。

(8) bā̄n-ge-brèc 'breaking of bones' (1442a), clústor-clèofan 'prison-house' (1021a), éfen-èaldum 'of like age' (553a), férð-ge-fēonde 'joyful in heart' (915a, 1584a), fórht-fèrð 'terrified at heart' (1549a, 1596a), gēomor-gìdd 'song of sorrow' (1548a), hánd-hrìne 'touch of the hand' (1000a), héofon-hàlig 'of heavenly holiness' (782a), héofon-hwèalfe 'vault of the sky' (545a, 1402a), lágo-làde 'water-way' (314a), lýft-ge-làc 'motion through the air' (827a, 1552a), mōd-ge-mỳnd 'memory' (688a), néaro-nèdum 'cruel bondage' (102a), sā̄r-slègum 'painful blow' (1275a), wáruð-ge-wìn 'moving surf' (439a), wǣl-wùlfas 'wolf of slaughter' (149a), wél-wànge 'field of slaughter' (1226a), wínter-ge-wòrpum 'snow-fall' (1256a), wúndor-wòrca 'miracle' (705a)

(8) で得られた事実は偶然の一致の可能性がないとは言い切れないことから、もう一つ別な作品から例をとってみる。(9) にあげたのは *Beowulf* に生じる 1471 例の複合語のうち、二つの構成素の主強勢音節の初頭位置の子音が同一となる 28 例のすべてである。

(9) béarn-ge-bỳrdo 'child-bearing' (946a), brȳd-bū̀re 'woman's room' (921a), cwéalm-cùman 'murderous comer' (792a), dēað-dège 'death-day' (187a, 885a), éall-ìrenne 'all-iron' (2338a), féla-frìcgende 'learning much' (2106a), fén-frèoðo 'fen-refuge' (851a), férhð-frècan 'bold in mind' (1146a), gēo-sceaft-gàsta 'fated spirit' (1266a), gīomor-gỳd 'mournful song' (3150a), góld-gỳfan 'gold-giver' (2652a), grýre-gèatwum 'warlike trappings' (324a), grýre-gìeste 'terrible stranger' (2560a), héard-hìcgende 'brave-minded' (799a), héoro-hōcyhtum 'sword-hooked' (1438a), hílde-hlǽmmum 'battle-crash' (2201a, 2351a, 2544a), mīl-ge-mèarces 'mile-mark' (1362a), sǣ-sìðe 'sea-journey' (1149a), s(c)ýn-scàþa 'hostile demon' (707a), swā̄t-swàðu 'blood-track' (2946a), þēod-þrèaum 'great calamity' (178a), wīd-wègas 'distant regions' (840a, 1740a), wīg-ge-wèorþad 'distinguished in battle' (1783a), wīg-wèorþunga 'honour to idols' (176a)

これらの例から興味深い事実がいくつか指摘できる。まず第一に、*Andreas* と同様、二つの構成素の主強勢音節の初頭音が一致する例は *Beowulf* でもすべて第一半行に生じていることである。したがって、この事実は、単なる偶然の一致によって生じたものではなく、さらに、一古英詩人の個人的な技巧の産物としてではなく、当時の詩人たちに共通の言語事実に基づいていることが分かる。すなわち、当時の詩人たちは、複合語の第二要素の強勢は言語的には強勢従属によって若干弱まってはいるものの、韻律上は第一要素の強勢（＝複合語全体の主強勢）に準じるものとみなして、頭韻に活用し、その結果、複合語に二重頭韻が実現したといえる。二番目に、*Beowulf* は *Andreas* の 2 倍弱の規模であることを反映して、用いられている複合語の数も 2 倍近いが、二重頭韻に関与しうるタイプの複合語の数はほぼ同じであることから判断すると、*Beowulf* 詩人は *Andreas* 詩人ほどこの種の複合語を活用していないといえる。第三に、この種の複合語は 2 つの作品間でほとんど重複していないことから、詩人は理想的な頭韻形式である二重頭韻を実現するために、その場しのぎに、句ではなく、複合語を臨時語として用いたといえる。もっとも、二重頭韻を実現させるということになると、語の選択の自由がきく句の方がはるかに有利であるにもかかわらず、なぜ複合語を多く用いているのか、その理由ははっきりしない。4 番目として、gēo-sceaft-gāsta は 3 つの語から成るが、この語は[[gēo+sceaft]gāsta] という内部構造をしていて、強勢の程度を強い順に 1, 2, 3,で表すと、$\overset{1}{\text{gēo}}$-$\overset{3}{\text{sceaft}}$-$\overset{2}{\text{gāsta}}$ という強勢型を示し、強勢従属を 2 度受けた sceaft の強勢はかなり弱まっているが、一度だけの gāsta は副強勢を受け、頭韻に関与しうる強さを保っている、といえる。付記すれば、*Andreas*（63b, 946b）に生じる ín-wit-wrāsne 'cruel bondage' の場合、第一要素は独立語ではなく接頭辞であり、語全体は［[in-wit] wrāsne］という構造であることから、wit は強勢従属を 2 度受けてかなり弱化していて、そのために wrāsne とは二重頭韻を形成しないという解釈が成り立つ。2 例とも第一半行ではなく第二半行で用いられているという事実はこの解釈に対する強力な傍証となっている。

今回分析対象とした 12 の古英詩のうち、*Andreas* と *Beowulf* 以外の作品でも、（10）にあげたように二重頭韻を可能にする複合語が用いられている。

（10）*Elene*（全 7 例）: fýrn-ge-flìt 'old stroke'（903a）, góld-gìmmas 'gold-gem'（1113a）, héolstor-hòfu 'dark dwelling'（763a）, lýft-lācende 'floating in the air'（795a）, mōd-ge-mỳnd 'memory'（381a, 839a）, wúndor-wỳrd 'wonderful event'（1070a）

The Dream of the Rood（全 1 例）: dōm-dæ̀ge 'Doomsday'（105a）

Juliana（全 5 例）: lýft-lā̀cende 'playing in the air'（281a）, sār-slège 'painful blow'（341a, 547a）, swéord-slège 'sword-stroke'（671a）, wēoh- wèorðinga 'worshipping of idols'（180a）

Phoenix（全 8 例）: blēo-brỳgdum 'variety of colours'（292a）, dēað-dène 'valley of death'（416a）, fórht-ā-fǽred 'terrified'（525a）, héofum-hrȍfre 'vault of heaven'（173a）, wíll-wònge 'pleasure place'（89a）, wínter-ge-wǽdum 'garment of winter'（250a）, wínter-ge-wèorp 'winter storm'（57a）, wóruld-wèlan 'worldly possession'（480a）

Widsið（全 1 例）: éfen-èald 'of the same age'（40a）

これらの複合語の例はすべて第一半行に限られていること、および、作品ごとの重複は少ないという点で、*Andreas* と *Beowulf* の場合と共通している。一方、全 81 行という短詩ながら、すべての第一半行で二重頭韻が実現していて、複合語の多くが臨時語として用いられているなど、きわめて技巧的な詩である *The Riming Poem* には二重頭韻が生じている複合語の例が 1 つもない。このことはかなり奇異に感じられるが、背景にどのような言語上の理由が存在するのか今のところ不明である。

まとめと今後の課題

これまでの分析結果を総合すると、複合語の第二要素は強勢従属を受け、言語的には副強勢にまで弱まっているが、韻律上は主強勢と同等とみなされているという結論が得られる。このことは、複合語の 2 つの構成素の強勢音節の初頭子音が二重頭韻を形成すること、および、該当例が第二半行には全く生じないという分布上の事実から導き出される。余剰頭韻は、強勢の観点からは正当化されるものの、頭韻本来の機能は長行においては第一半行のプロミネンスを高め、半行においてはより左側の部分のプロミネンスを高めるものであることから判断して、単なる偶然の一致とみなした方がよい。

今回の分析結果は、藤原（1990）の所説の一部に修正を迫るだけではなく、古英語の語形成、とりわけ、語と句の境界、臨時語の成立などの研究に大きな貢献をするものと思われる。なかでも、句を構成する 2 語のうちの最初にくる語と、2 語から成る複合語の第二要素はいずれも頭韻に関与しうる強勢を維持していることが明確になったことから、両者の強勢の程度差はこれまで考えられてきたよりも小さい可能性が強くなったといえる。このことは古英語の句と

語の境界をより不明確にすることになるが、より事実に近づいたという気がする。なぜなら、古英詩の校訂者の間では、さまざまな基準を設定しても、なおかつ語か句かの判断で意見が分かれる例が少なくなく、語と句には元来それほど明確な区別はなかったかも知れないからである。ここでその一例をあげておこう。*Genesis A* の校訂本のうち、最新かつ最も写本に忠実な Doane (1978) と、伝統的韻律論の枠組みに忠実な Krapp (1931) から、語か句で解釈の分かれるものをすべて抜き出したのが (11) である。(a) の例は、Doane が複合語とみなしているのに対して、Krapp は句と解釈している場合、これとは逆に、Doane は句と解釈を下しているのに対して、Krapp は語とみなしている例が (b) である。(もっとも、wéndeð sǣ > Wéndel-sǣ のように、校訂の結果、写本とは全く別の語になることはある。) このように、文脈、語形、語義などを総合的に判断材料としても、なおかつ語か句かの解釈に違いが出てくる。やはり、語と句の境界は本来不透明であったのであろう。

(11)	Doane (1978)	Krapp (1931)
(a)	*grǽs*-un-*grēne* 'un-green, as with grass' (117a)	*grǽs* un-*grēne* 'not gree with grass'
	fórð-gǎn 'go forth' (870b)	*fórð* gǎn 'go forth'
	swǽtig-hlēor 'sweaty face' (934b)	*swǽtig* hlēor 'sweaty face'
	sálwed-bòrd 'darkened board' (1481a)	*sálwed* bórd 'darkened board'
	fúl-*frēolīce* 'very noble' (1618a)	*fúl* *frēolīce* 'very noble'
	hǽa-bỳrig 'high city' (1821b)	*hǽa* býrig 'high city'
	éall-tèla 'quite well' (1905b)	*éall* téla 'quite well'
	hǽa-bùrh 'high city' (2519a)	*hǽa* búrg 'high city'
(b)	*sélf* cýning 'the very king' (1797a)	*sélf*-cỳning 'the very king'
	fólce ge-trúme 'people's company' (2046b)	*fólc*-ge-trùme 'army'
	wéndeð sǽ 'the sea runs' (2211a)	*Wéndel*-sǣ 'Mediterranean Sea'
	þīne *þéarfende* 'being in need of food' (2482a)	*wíne*-þèarfende 'friendless'

*h*ēah stēap-rèced 'high building' *h*ēah-stèap réced 'very high hall' (2840b)

今後に残された課題の一つとして、接頭辞と語幹で形成された語（すなわち、本稿で合成語と呼んでいるもの）における強勢従属、とりわけ語幹の副強勢の程度を明らかにすることがある。しかし、この問題に取り組むためには、i）接頭辞は数が限定された、いわゆる閉ざされた組織（closed system）であるために、頭韻に関与する子音の音質が限られていること、ii）be-, for-, ge- のように本来無強勢であるものと、ed-, mis-, un- などのように付加される語の品詞によって強勢の有無が決定されるものがあること、iii）ánd-wȳrdan 'answer', fúl-tùmian 'assist', ónd-swàrian 'answer' などのように名詞から派生した動詞は接頭辞に主強勢があることなどを考慮に入れた綿密な分析が前提となる。この課題については目下予備的な調査段階にすぎないため、本稿では決定的な結論は出せないことから、若干の見通しを述べるにとどめる。

（12）にあげたのは、接頭辞と語幹の強勢音節の初頭位置にくる子音が同一となる例を全く無作為に古英詩の中から抽出したものである。

（12）mís-mìcelra 'of more varying size' (*Exodus* 373a), sín-sòrgna 'of constant sorrows' (*The Wife's Lament* 45a), sýn-snæ̀dum 'ceaseless piece, huge gulp' (*Beowulf* 743a), ún-èarge 'brave' (*The Battle of Maldon* 206a), ún-ēàðe 'difficult' (*Andreas* 205a), ún-òrne 'worn-out, old' (*The Battle of Maldon* 256a)

これらの例すべてについて、Bessinger and Smith (1978) のコンコーダンスを用いて古英詩全体における生起状況を調べたところ、いずれも他には用いられていない 1 回きりの臨時語であることが分かった。（ún-ēàðe だけは *The Metrical Psalms of Paris Psalter* にさらに 1 例用いられているが、この詩は古英詩の伝統に則って作られていないことが知られていて、他の古英詩と同等に扱えないことから、ここでは除外してある。）さらに、これらの合成語はいずれも第一半行にのみ生じていることから、これらの語には二重頭韻が実現している可能性が強い。そうなると、これらの合成語は複合語と（とりわけ、強勢型において）どういう違いがあったのか、それともこのような違いはそもそもなかったのか、という新たな問題が生じてくる。これについても、新たな課題として、豊富なデータに基づいて検討がなされねばならない。ちなみに、lēof-lic 'dear' (*Andreas* 1446b, *Beowulf* 2603a) のように接尾辞の初頭位置の子音が語幹の主強勢音節の初頭位置の子音と同一となる例は少なくないが、第二半行にも

生じるという決定的な事実によって、二重頭韻の可能性は排除され、同時に、接尾辞の強勢はきわめて弱いという主張も成り立つ。

参考文献

Blake, N.F. (ed.) 1964. *The Phoenix*. Manchester: Manchester University Press.

Brooks, Kenneth R. (ed.) 1961. *Andreas and The Fates of the Apostles*. London: Oxford University Press.

Cook, Albert S. (ed.) 1904. *Judith: An Old English Epic Fragment*. (The Belles=Lettres Series, Section I, Vol. 7) (repr. 1972) New York: AMS.

Doane, Alger N. (ed.) 1978. *Genesis A: A New Edition*. Madison and London: University of Wisconsin Press.

Fry, Donald K. (ed.) 1974. *Finnsburg Fragment and Episode*. London: Methuen.

Fujiwara, Yasuaki. (藤原保明) 1990. 『古英詩韻律研究』広島：渓水社.

——. 1991. 「古英語 hund の言語特性について」『現代英語学の諸相』東京: 開拓社.

Gordon, E.V. (ed.) 1957. *The Battle of Maldon*. London: Methuen.

Kent, Charles W. (ed.) 1889. *Elene: An Old English Poem*. (repr. 1973) New York: AMS.

Klaeber, Frederick. (ed.) 1950. *Beowulf and The Fight at Finnsburg*. Boston: Heath.

Krapp, George Phillip, and Elliot Van Dobbie. (eds.) 1931. *The Anglo-Saxon Poetic Records*. vol.I. New York: Columbia University Press.

Leslie, R. F. (ed.) 1988. *Three Old English Elegies*. Exeter: University of Exeter Press.

Malone, Kemp. (ed.) 1977. *Deor*. Exeter: University of Exeter Press.

Strunk, William. (ed.) 1904. *Juliana*. (The Belles=Lettres Series, Section I, Vol. 8) (repr. 1972) New York: AMS.

Swanton, Michael. (ed.) 1987. *The Dream of the Rood*. Exeter: University of Exeter Press.

Whitelock, Dorothy. (ed.) 1967. *Sweet's Anglo-Saxon Reader in Prose and Verse*. Oxford: Clarendon Press.

Zettersten, Arne. (ed.) 1979. *Waldere*. Manchester: Manchester University Press.